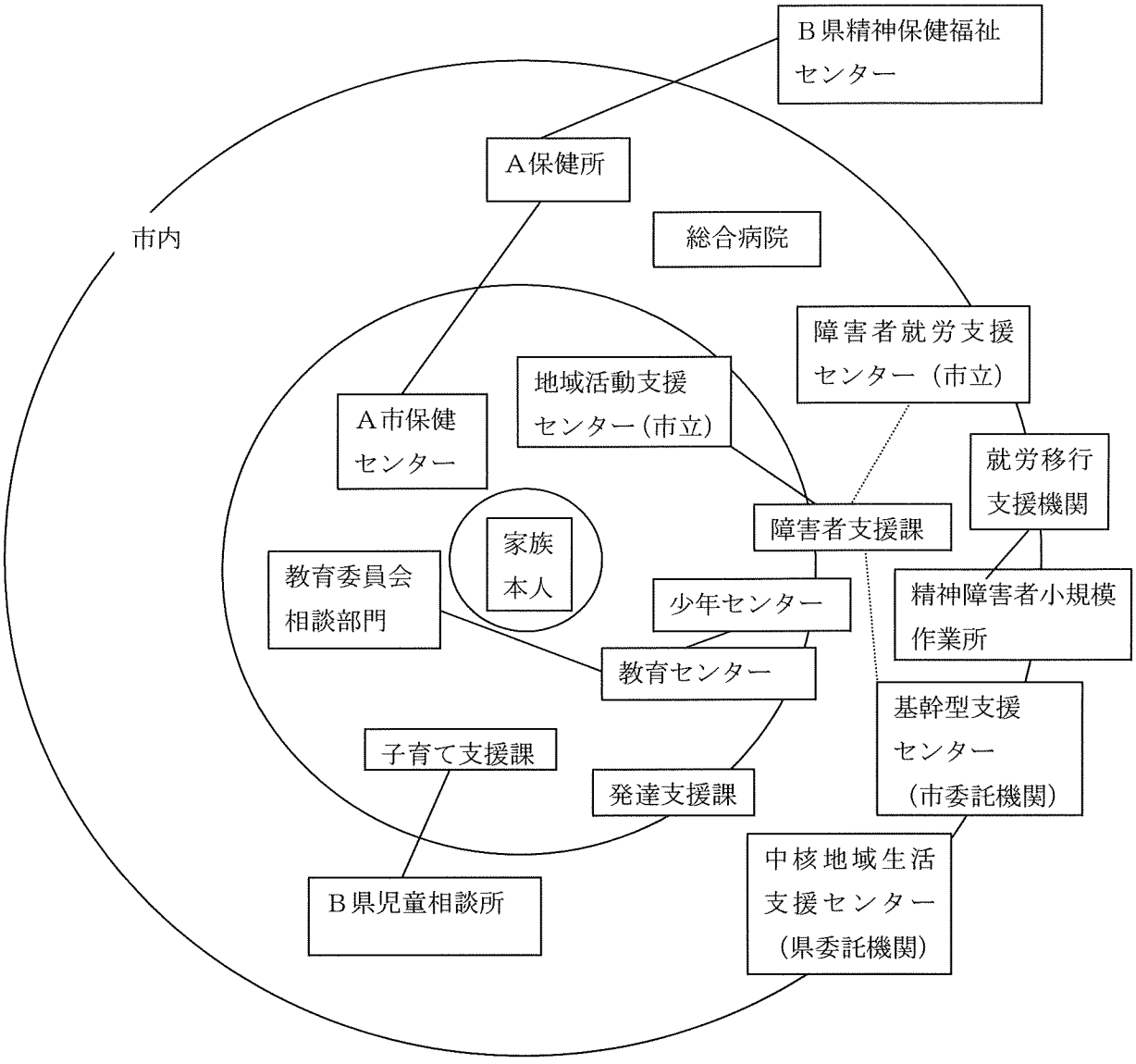
図 3. A市ひきこもり支援機関と本人家族からのアクセス体系図



厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）
分担研究報告書

親ガイダンス事例集

分担研究者　皆川邦直[1)]
研究協力者　関谷秀子[2)]　中 康[2)]

1) 法政大学現代福祉学部　　2) 関東中央病院

研究要旨
昨年度、統合失調症，発達障害を除く非精神病性の思春期のひきこもり（20歳未満）のガイドラインを作成したが、今年度は、その補足として事例検討を行って事例集を作成した。事例は前思春期から初期思春期、中期思春期、後期思春期および青年期のそれぞれ男女２名ずつ、計８名の青少年の親である。第三者によって本人が同定されるような資料はすべて削除した。また一部該当例以外の事例の情報を混ぜることによって本人ならびに家族の匿名性を保つように配慮した。そのためここで報告する事例は実在しない。

A. 研究目的

昨年度、統合失調症，発達障害を除く非精神病性の思春期のひきこもり（20 歳未満）のガイドラインを作成したが、本研究はそれを引き継ぎ，思春期青年期のひきこもりの子どもの親ガイダンス事例集の作成を研究目的とした。

B. 研究方法

事例は前思春期から初期思春期、中期思春期、後期思春期および青年期のそれぞれ男女２名ずつ、計８名の青少年の親である。第三者によって本人が同定されるような資料はすべて削除した。また一部該当例以外の事例の情報を混ぜることによって本人ならびに家族の匿名性を保つように配慮した。そのためここで報告する事例は実在しない。

C. 研究結果

事例１：初診時小学校５年生男子（不登校・ひきこもり）

概要

約 2 年間の隔週の両親ガイダンスを施行した事例である。子どもは，初診時 10 歳の男子，小学校 5 年生の夏休みに受診した。両親と 3 人暮らし。4 年生から受験塾に通って受験勉強を始めた。成績は伸びて全国模試でも好成績を上げることができるようになった。ところが 5 年生になって担任が男性教諭に変わり，クラスで騒ぐ男の子たちが注意を受けるようになった。その声のきつさに受け持ち教諭が怖くてどうしようもなくなった，と本人は母親に話をした。そして朝登校しようとして玄関に立つと腹痛や頭痛がひどくなった。次いで入眠困難/中途覚醒が始まり，食欲も低下した。母親は彼のあまりの体調の悪さと，間もなく夏休みに入ることから、学校には行かなくて良い，と救いの手を差し伸べた。学校を欠席するようになると共に外出も控えるようになった。両親は夏休みには受験塾を止めて本人の思う通りに過ごさせた。暴力暴言は出ていない。

発達のマイルストーンは正常または正常範囲

内であった。家庭内に目立つ問題はなく，両親は共稼ぎで，彼は乳幼児期には保育園に預けられて育った。彼の小学校入学前に母親は，自らの選択で常勤職を辞して非常勤として勤務するようにした。父親は温和でで日ごろから子どもとの接触をもっている。

両親面接では両親ともに協調的にわが子について話をした。母親のほうが父親よりも子どもの様子については熟知しているが，母親は息子について父親に十分な情報を提供しているようであった。

本人面接は，恐怖症的な高い不安が予想されたので，彼に両親と本人の家族面接か個人面接を選択してもらい，家族合同面接を行なった。彼は母親の意向を気にしながら話をしているようであった。声は小さく聴き取りにくいが，文法的にはしっかりした分かる話をした。その内容は両親から聞いたものと同様であった。

アセスメントの説明

頭脳明晰な少年であり，今回の腹痛や頭痛が発作的に登校時に現れるまでは順調に育っていたように思われる。彼の話すとおり，担任の先生のクラスの男のたちへの注意の仕方がやや荒々しかったことと，発達的に前思春期に入って，不安が高くなりやすい時期でもあったことが重なって，彼は本当に担任の先生が怖くなったのであろう。昔からこの状態は恐怖症と呼ばれてきたが，一旦このような不安の高い状態に陥ると，不安軽減のために自動的に子ども返りが生じて，常に母親と一緒にいる必要性が出てくるのが常である。高い不安は発達が進むと共に軽減するはずであり，中学まで持ち越す事もあり得るが，これまでの発達の様子から推測する限り，一過性で良くなるのではないか。彼の不安を下げる方法としては運動がある。思春期になると一気に母親離れが進むので，父親と一緒に楽しめる運動か家族3人が一緒に参加する運動が良いであろう。不眠と食欲不振があるので不安を下げる薬物療法もあり得るが，運動によって不安がどの程度低下するかを見てから薬物療法は考えれば良いであろう。中学受験は今から無理と断定はできない。経過の中で考えて行けば良いであろう。取りあえずは親ガイダンスで彼の不安を下げるようなかかわりが望まれる。

ガイダンス経過

隔週1回，毎回，両親揃ってガイダンス・セッションに参加した。アセスメントと治療方針についての説明を聞いた後，両親も本人も，今後の道筋が見えたようで安心した，という。運動は何にしようか話し合い，父親が相撲を提案したところ，本人も乗り気になった。そして彼は，毎日のように父親の帰りを待って相撲を取った。と共に睡眠も食欲も回復してきた。夜に怖い夢を見て目が覚めることも減ってきたが，こんな夢を見るんだけどと，彼は母親に先生の意見を聞いてきてと頼んだ。怖い人が出て来て，追い掛け回されて目が覚めるのだそうだ。そこでセラピストは，多分不安夢と言われる夢をみて恐怖のあまり目が覚めてしまうのであろう，このタイプの夢は不安が下がってくると自然に消えて行くから余り心配しないで良いだろうと彼に説明するように両親に助言した。

2ヶ月も経過すると彼は家族3人で散歩にでかけることができるようになった。睡眠や食欲も正常化して薬物療法を使う必要はなかった。昼間の時間をもてあますようになり，自分から勉強を少しだけする，と言い出した。

3ヶ月目になると変な夢を見たという。そこで，その内容を思い出せる範囲で聞いてきて欲しいと両親に依頼した。彼が母親に語ったところによると，課外授業の夢で同級生と歩いて水族館にでかけた。バスを降りて歩き始めると，途中で，変な30代の男の人が出て来て，何人かでその男の人を取り囲んだ。そしたらその人は逃げ出して行った。それでみんなで水族館に入って楽しんだ。そんな夢だったが，夢で目覚める事はなく，朝起きたら夢だったのかと思った，と母親を介して伝えて来た。

彼の恐怖は夢にも現れていたのだが，この夢は今までの夢と違って彼の睡眠を妨害していない。つまり彼の恐怖症性の不安は睡眠や食欲を妨害するような強いものではなくなったという事であり，夢の内容は無意識の願望充足として解釈できる。つまり，担任の先生なんか怖くない，生徒を怒鳴るなら，僕たちでやっつけちゃうよ，という彼の願いがこめられているのだろう。以前は自分の心の中にある，この先生をやっつけちゃうぞ，という気持が怖かったのだろう。しかし，今は自分のそういう気持も怖くなくなってきているようだから，そんなに遠くない将来，心配なしに外出できるようになるであろうし，学校にも復帰できるようになるのではないか，と親を通して彼に伝えてもらった。

その 2 週間後に彼は怖がることなく学校近くまで外出できるようになった。そして両親の勧めた教育委員会の教育相談センターに通い始めてプレイセラピーを楽しむようになった。両親は学校への復帰についてセラピストの意見を求めてきた。セラピストは3学期からは登校再開も不可能ではないように感じて、冬休み前に担任と相談するように助言した。担任は直接の復帰ではなく，不登校児童の学級にまず通うように勧めた。こうして 3 学期は不登校学級と教育相談センターに通うため定期的に外出するようになった。両親はこの期間，クラスの他の児童は反応しないのに，何故わが子は先生をあのように怖がるようになったのか，と疑問を抱いた。

セラピストは次のように説明した。すなわち幼児期に男の子は母親を独占したいと願うようになり，その願望を満たす上で父親が邪魔になる。殺人願望と言うのだが，その一方，子どもは父親を必要としてもいるので，殺人願望を危険視しすぎて，自分の外に放り出そうとする。父親に自分の願望を投影して，今度は父親が自分を亡き者にしようとしているかのように怖く感じることがある。この恐怖をそのまま認識するのは怖すぎるので，怖い対象を父親から何かに置き換える。それが動物恐怖であったり，登校恐怖であったりする。担任の先生の大声での注意は恐怖対象を父親から置き換えるのに丁度タイミングが良かったのかもしれない，と説明した。そして不登校のような行動上の問題やその他の心の症状の原因を一つに求めることは難しく，いくつもの要因が重なり合って発生すると考えられていることを付け加えた。この細かな説明は本人に伝える必要はないとも助言した。母親はなかなか理解が難しい，父親は自分にも何となく覚えのあることで，分かったと述べた。

6年生になった4月からは通常学級に復帰した。同級生に朝迎えに来てもらい学校に一緒に登校した。勉強にも随分集中することができるようになった。そこで1学期の終わる前に受験したいなら塾を再開しても大丈夫だろうと伝えた。彼はその気になって夏休みになってから別の塾に通い始めて親ガイダンスは終了した。そして志望校に合格して中学生活が始まったが，入学後の1年の間に母親は 2 回ほど息子の学校適応に不安を覚えて追加ガイダンスを受けて，息子が大丈夫であることを再確認した。

事例2：初診時小学校5年生女子（不登校，自傷・自殺の脅し）

概要

小児神経内科からの紹介で精神科に来院して1年間の母親ガイダンスを実施した。初診時，子どもは10歳，小学校5年生の女子。小学校4年生の時に生理が始まり，その後間もなく，失立失歩，不登校，自傷の脅しを呈するようになった。独歩できないため車椅子を使用していた。義父は優しく，本当の娘のように接してくれるが，娘は2 - 3 年前にはなついていたのに，症状出現前後から義父を嫌がるようになった。母親にひどく反抗的な時があり，母親の言う事を聞かずに，母親の意図とは正反対の行動に出たりする。しかし彼女の行動上の問題は家庭の外にまで波及することはない。反抗的な言動に走られると母親としては腹が立ってきて，娘を無視することがしばしばであった。そうすると自分の手首に赤マジックで

横に線を引いて，それを母親に見せながら，手首を切ってやると脅すというのである。それが毎日のように続くので，母親としては生きた心地がせずに，疲れ果てている。この密着したアンビバレントな母娘関係に義父は立ち入る事はできずに，傍観する以外にないという。

母親は10代で妊娠，結婚，出産したが，娘が2歳の時に離婚した。そして娘の乳幼児期には母親と母方祖母が協力して育児に当たった。しかし娘の乳児期についての母親の記憶は余り残っていない。離乳は1年前後，そして排泄訓練には苦労した。4歳頃から母親は夜勤の仕事について，母方祖母が育児を担当した。実父は離婚以前から余り帰宅することがなく，従って娘には実父との接触が殆どなかった。

娘が小学校2年生の時に現在の夫と再婚した母親は，仕事を辞めて専業主婦としての生活を始めた。娘は義父を以前から知っていて，祖母を離れて3人の生活に慣れるのに問題はなかったが，初潮後は距離を取るようになって，義父が近づこうとすると嫌がる，という。

本人の面接では車椅子に座って話をするが，年齢に比べて幼い印象を与える。立って歩けないことについては全く説明できないのか，触れたくないのか．気にしていないのか不明であった。母親および本人の面接から現在母子共生関係に退行していることは明らかであったが，本人の最大の発達がどこにあるのか，すなわち潜伏期に到達した事があるのか否かは不明であった。

アセスメントの説明

本人がひどく幼児返りした状態にあること，および複雑な家族背景があるので，本人にはプレイセラピーの中で自分の気持を表現していく事が問題解決の役に立つと思うとだけ伝えた。そして母親にはアセスメントの詳細について伝えた。

初潮を迎えて娘さんは大人になる道を歩み始めたのだが，自信がもてずに困り果てているように見える。年齢相応の友人関係はもてていない。母娘の世界で毎日を過ごしているが，本当は自信をもって思春期の育ちを享受したいのだろう。ところが自分の気持を言葉で表す事に躊躇があるのか，一人で立って歩く事のできない身体症状を通してそれを表現しているのであろう。自信がもてないので母親に頼りたいが，頼ると今度は自分を失ってしまうのではないかという心配が出てくるので頼れない。前門の虎，後門の狼といった事態に陥って失立失歩という身体症状を表現しているのだが，それでもひどい不安に襲われて，その不安から逃れるために手首自傷の脅しを仕掛けてくるのであろう。それによって一時的に不安から逃れようとしているように思われる。しかし意図的に母親を困らせようとか，怖がらせようとしているのではなく，彼女のどうしようもなく不安な寄る辺なさを母親に救って欲しい，ということなのであろう。

彼女の困り果てている気持を彼女が言葉で表す事ができるような手助けが彼女の役に立つように思われる。一つは親ガイダンスであり，母親が家庭での母子のやり取りをセラピストに語り，行動観察から娘の気持を理解して，彼女のニーズに見合う対応をする，また彼女が心の内面を言葉にして母親に伝える手伝いをすることである。もう一つはプレイセラピーを実施することである。母親は治療方針に合意した。しかし娘はプレイセラピーを拒否した。

ガイダンス経過

娘はほぼ機嫌の良い一日を過ごしたとしても，入眠間際には突然不機嫌になって，母親に当たり散らす。例えば，じゃあ，お茶飲んで寝るねというまでは機嫌が良かったのに，突然，ママの入れるお茶はまずい，と言い出す。ではあなたが自分で入れてみる？と聞いただけで，美味しいお茶を入れろ，と叫ぶ。母親が，また来たかと思うその瞬間に，新聞を丸めて投げつけてくる，母親は娘の機嫌を取ろうとするが，何を言っても，しても、しなくても機嫌は悪くなる一方で，母親はお手上げになって自室に戻る。しばらくすると母親の部屋に入って来て，赤マジックで印のついた手首を

見せて，切ってやると叫び出す。そして二人は母親のベッドに入り，母親は娘を抱き寄せて娘の機嫌の治まるのを待つ。母子のやり取りの内容はそのたびに少しずつ違うにしても，基本的にはこのアンビバレントな関係の反復，すなわち再接近期への退行に伴う危機的な状況に陥って母親も娘も疲れ果てていることが理解された。

そこで，セラピストは，母親に以下のように伝えた。すなわち母親は娘が素敵な女性に育って行くように願っている。しかしどうすれば娘の役に立てるのか分からずに困り果てているようだ、と。そしてお母さんもできるだけ手助けして行きたいと思っていると娘に伝え返すように，また母子間でそういう話し合いをするために，母親と娘の座る位置をもう少し離して距離を取ったほうが良いだろうと助言した。昼間の機嫌の良い時を見計らって，夜寝る前に気持が不安定になることが続いているので，先生に相談したら，こういうふうに言われたんだ。ママもそう言われてみれば，そうだなあと思うので，あなたに伝えるんだけれど，寝る30分くらい前になったら二人の距離を少し置いてみようよ。で，あなたの気持がどうなるか見てみようよ。母親はセラピストの提案を受け入れて，早速，娘に話をしたところ，娘はその場でそれを受け入れた。

母親は，先生から言われたんだけど，今までより少し離れて座ってみようよ，と切り出した。すると娘は，ママの入れるお茶はまずい，といういつもの話ではなく，どうしてそういう風に言うのか分からないけど，そう言いたくなっちゃうのだと母親に語った。これに対してセラピストは，母親がどう対応をしたか聞いた。母親は，そうなんだ，とは言ったが，言葉に詰まってしまって，また荒れたが，荒れ方がいつもほどではなかったという。そこでセラピストは母親に，何が，そう言わせるのか，ママも一緒に考えてやって行きたいと娘さんに返すように，それから将来の夢について聞いて上げるように助言した。

母親の問いかけに娘さんは，きれいな服を着てスタイルの良い大人になりたい，といったことを語ったという。セラピストは，彼女は実父がどんなスタイルの男性であるか知っていますか？と質問した。多分，知らないだろうという答に，一緒に暮らしていれば，どんな父親，母親のスタイルというのは分かっているから，自分の将来の身体つきを予想しやすいが，もし娘さんが父親を知らないのなら，将来の自己象を想像するのにハンディがありますね，母親として父親の話をするのは難しいですかと聞いてみた。すると，随分時間も経っているし，今自分は再婚して安定した気持でいるので，できないことはないだろう、と。そこで身長はどのくらいで，どんな感じの人だったとか，大人になって行くのに父親のことは知りたいだろうから，ママに質問して良いからと，伝えるように助言した。こうしたやり取りから，彼女の不安は下がり，半年後には自立歩行が可能になった。

しかし，親ガイダンスによって常に順調に回復が進んだのではなく，前進と後退の反復の中で，後から振り返れば，随分回復したな，といった印象を抱くような回復であった。娘さんが前向きの気持で毎日を過ごそうとする時に彼女を悩ませたのは彼女の出生をめぐる疑問であった。娘さんは繰り返し，どうせママは私なんかいらないんでしょ，私のことなんか嫌いよね，私はママのお荷物よね，生まれて来ないほうが良かったんだよね，などの陰性感情を表現する言葉が現れて来て，ママを責めるという悪循環が観察された。言い換えれば，娘さんには両親がうまく行かなくなったのは自分のせいだったのか，自分なんか生まれてこないほうが良かったのかなどの深刻な疑問のあることが窺われた。そこでセラピストは母親にママの思春期はどんなであったか，実父とはどうやって知り合ったか，どういうところに惹かれたのか，妊娠中に生まれてくる赤ちゃんへのどんな期待や心配を抱いたか，初めて赤ちゃんを抱いた時の印象などを娘さんに伝えるように助言した。

母親は助言のように娘さんに自分の話をした。母親が女の子を授かって嬉しかったという言葉

や両親の離婚は自分のせいではないという言葉を母親から直接聞いたことによって彼女の気持は和らいだ。こうして娘さんの母親攻撃の悪循環は止まった。

このような変化の前に，母親は娘の早期乳幼児期に夫婦関係が不安定で，いつもいつも娘を愛していると感じていたか否かは自信がない，と躊躇した。そこでセラピストは確かに常に愛情を持ち続けていることはできなかったかもしれないが，それで食事を与えなかった事はあるだろうか? 娘さんが怪我するような暴力を振るったことはあるだろうか？ 1週間も1ヶ月も娘さんを祖母に預けて一度も会わなかったようなことはありますか？ と質問した。そういうことはなかったという事であったので，母親が多少の後ろめたさを感じているのは理解できるが，今，娘さんが自分は母親に愛されている，大事に思われていると思えるように関わることが最も大切であり，そう感じる事ができれば娘さんは将来に向かって自分を作って行くことができるようになるだろう，そして不安に駆り立てられることなく，友達や担任と一緒に過ごす事もできるようになる。そうなれば，過去に拘る必要性はなくなるのだから，今お母さんが娘さんのために頑張りましょうと励ました。この励ましは有効であった。母親は繰り返し繰り返し娘が再接近期に退行して母親との近しい関係を破壊しようとする動きに駆り立てられるのを耐えて，娘の前向きの姿勢を支える事ができるようになった。つまり，母親が責められて自室にひきこもることはなくなり，娘に不安定な情緒が押し寄せる時に，母親はそれに反応せずに娘の気持が落ち着くまで見守ることができるようになった。こうして初診から1年が経過して，娘のヒステリー症状は解消して，通常の学校生活に戻った。

事例3：初診時中学校2年生男子（不登校・家庭内暴力・ひきこもり，完璧主義）

数年間を外国で暮らした後，中学1年生の長男は秋まで塾通いをして勉強していたが，2学期になると塾通いを止めて，塾の勉強は下らないからしないと言い出した。そして12月に入ると塾を辞めた。そして3学期にはまだら登校から間もなく完全不登校が始まった。

息子は勉強をする理由が見当たらない。勉強は下らない，勉強する気にならない，真面目に勉強をしている同級生に腹が立つ。特に女子には苛立つと云う。母親は長男にそう言われると，何も言えなくなって，絶望的な気持になる。父親は何とか学校に行って勉強もしろよと言いたいのだが，勉強をする気が起こらないと言われると，どこか具合が悪いのかな，と思って話し合いを続けて良いのか否か自信がなくなるという。こうして2年生の3学期の終わりに初診した。

3年生になる直前に学校には行かないと宣言した。そして完全不登校が始まると，テレビゲームに熱中して一日を過ごす，また妹の行動にけちをつけて暴力を振るう，また母親にも罵声を浴びせ暴力を振るうようになった。担任教諭のできるだけ学校においでよ，と云う働きかけには，今は学校に行かないと強い口調で答えて動かなかった。

面接ではニキビが一杯のいかにも思春期真っ盛りの男の子という感じであり，見るからにイライラと落ち着きがなく，不安が非常に高い事が伝わってきた。同級生の男子との親しい関係を作る事はできずに，彼らを嘲笑する言葉を表現した。女子に対しても同様で，セクシュアリティについて興味はありそうなのだが，それを認めることはできない。テレビゲームに夢中になってあり余るエネルギーを発散する以外に身を保つことは難しそうであった。そして登校再開の見通しは立たない状態であった。

妊娠・分娩から発達のマイルストーンはすべて正常または正常範囲内で，幼稚園，小学校を通して特に問題はなかった。外国では日本人学校に通っていたので，クラスは少人数であった。現在のクラスは30人クラスで生徒も多く，それが問題なのかと母親は疑問に思っている。

アセスメントの説明

思春期中期に入り，今までに経験した事のない自分にどう対処して良いのかが分からないという感じでいるのだろう。通常は，同性の親友と一緒に色々な行動を共にして，エネルギー発散するのだが，彼は海外帰国子女という事もあって，それができないままに思春期を迎えている。一日中テレビゲームでエネルギーを発散して，母親に罵声を浴びせたり，妹に文句を言ったり，暴力を振るわずに過ごす事ができれば，その一日は彼なりに頑張ったと理解したほうが良いであろう。このような状態はいつまでも続くものではなく，大人になりつつある自分の身体に慣れるにしたがって再び落ち着きを取り戻して行くのが常である。16 - 7歳頃には大分落ち着くだろう。それまでの間，登校する，しないは大きな問題ではない。むしろ高校にも行かずに将来どうなってしまうのだろうという両親の心配は分かるが，やがて大学をどうしようかという事を自分なりに考える時がやってくるので，それまで待っていることが親としては大切である。親が我慢できずに動きすぎると，暴力が発生したり，それに伴って自分はダメ人間だ，幸せになる資格はない，お先まっくらだと感じたり，死にたくなって自殺企図することもある。親が心配の余り普通高校や定時制高校への入学やサポート校への進学をせかせたりするほうが，子どもの自尊心を傷つけることになり，あるいは自分たち両親は子育てに失敗したという気持になりやすい。そうなると子どもは自分が親を不幸に陥れている，困らせている，親の夫婦仲を引き裂いているなどの思いを抱くようになって，不登校で自尊心が傷つく以上の心の損傷を被る事になる。つまり心の2次的損傷をひどくしてしまう。そうなってから普通に育つ健康な仲間の中に再び入って行くのは難しい。そして大学を卒業して職を得るような道からはずれてしまう。だから落ち着いて自分を保つ事ができるようになるまで高校に行かないで良い。むしろ落ち着いてから認定試験経由で大学に進学するほうが，長期的には望ましい発達のレベルにまで到達し得るであろう。そういう経路を通って大学に入学してくる学生は少なくない。今，高校に進学したいと思い，そうできるのなら受験すれば良いし，できそうもなければ，焦ってサポート校やフリースクールに通う必要もない。今すぐに決める必要もなく，3年生の経過の中で様子を見ながら決めて行くのが良いのではないか。その間，取り合えずテレビゲームや読書でエネルギー発散して暴力を振るわずに済むのなら，せいぜい親が息子さんにして上げられることは，一緒に運動をするとか，少なくとも毎週3回，1回1時間程度の運動を勧めることであろう。但し，母親と息子さんの二人でする散歩や運動は避けるようにと伝えた。両親はこの説明を聞いて安心した。本当に，2年も3年も閉じこもっている子どもが認定試験経由で大学に入学できるのだろうかと質問した。それについてはセラピストの知っている事実や経験を伝えて親ガイダンスを薦めた。

親ガイダンスの経過

週末は両親や妹と共に散歩をするようになった。と共に暴力を振るう事は殆どなくなった。しかし機嫌の悪い日はあって，なるべくそっとしておくように心がけているという。どんな事が彼の機嫌を悪くするのだろうかと問うと，やはり母親が学校の事を気にして息子に何か言ったりするといけないようだと言う。母親のこの気づきは大きく，母親なりにそういう心配を息子に表明するのを慎むようになった。次に，大学を卒業する意義について親子で話し合うように助言した。そして，父親と母親がわが子に大学教育を受けて欲しいと思う理由を彼に伝えてもらった。彼はこの話については否定せずに聞いたという。こうして比較的安定している日が続くようになった3ヵ月後に，息子さんに高校はどうしたいのかを聞くように両親に伝えた。

息子さんは高校には行きたいと伝えてきた。そこで高校に行きたいのなら秋には登校したほうが内申書の面でメリットはあることを伝えてもらった。すると彼は夏休み前の1週間，毎日登校

をしてみた。そして，登校は無理と彼なりに判断した。夏休み中は家族でいくつかの高校を見て歩いた。春から夏の終わりまでの半年近くの間に2-3回だけだが，荒れて彼は母親に暴力を振るう事があったが，そのために父親と息子さんの二人でガイダンスに訪れたことがあった。彼なりに暴力を振るう自分が嫌で来院したのだが，どういう経緯で母親に暴力を振るったのか話すことはできなかった。その次の回に，母親は息子さんが時々母親のところにやって来て，膝枕させてほしがることがあるが，もうそういう事はしないほうが良いのでしょうね，と質問した。実際のところ，息子さんにそう言われると母親はいけないのかなと思いつつ，ついつい彼の言うことを聞いてしまうのだという。セラピストは親離れの途上にあって，そうやって母親に甘える自分のいる事は，父親には知られたくないだろうし，仲間にも絶対に知られたくないだろう。しかし20代の半ばを過ぎてもまだ母親のおなかに自分の頭を乗せて，ママとこうしているのが一番幸せだみたいなことを言う息子さんもいますよ。確かに20代の半ばになってまだそういう事をしているのはいただけないけど，まあ，そういう形で母親に甘えることは最後のお楽しみ程度に思っていても良いのではないですかと応えた。

以来，彼が母親に膝枕を要求したという話は聞かなかった。彼は秋になっても登校しなかったが，それはそれとして，彼の高校進学希望を実現していく上で，母親は担任と連絡を取って動いた。その結果，高校受験について担任と何回か会って話をした。こうして年末に向けて，どこの高校を受験するか，しないかという話が両親と彼との間で繰り返された。彼は大学受験を目指すこともできるコースのある通信制高校の入学を決めた。入学が決まると共に，彼の緊張はとけて昔と変わりのない明るい表情に戻った。

事例4：初診時中学校2年生女子（不登校・家庭内暴力・ひきこもり）

概要

3年半にわたる隔週の母親ガイダンスを施行した事例である。初診時，子どもは13歳女子，中学2年生2学期。3人姉妹の末娘であり，父親は単身赴任で毎月2回ほど週末に帰宅する。しかし父親と娘3人との対話は殆どない。母親と3人の娘が父親抜きで過ごす家庭は大変そうだと容易に推測することのできる内容の話が母親から語られた。彼女は女子中学高校一貫校に入学直後より学校に馴染めなかった、という。中学2年になると母親に何故自分を女に産んだ，男に産み直せと言って暴力を振るうようになり，秋からは完全不登校に陥った。彼女が自分を生みなおせと言う時の娘の表情や鋭い目つきから、わが子は狂ってしまったと強く感じていた。

彼女は二人の姉と争う事はなく，暴言暴力もない。もっぱら母親を相手に女性であることの不満を言葉にして，次第に感情が乱れて母親に怒りを最初は言葉で，やがて殴る蹴るなどの暴力にエスカレートするという。母親一人で娘の暴言暴力を制御することは難しく，夫に頼りたくても単身赴任で母一人途方にくれる毎日であった。また暴言暴力の繰り返しから逃げ出す事もしばしばであるという。

中学に入学するまでは発達史上目だった問題はなく，初潮は小学校5年生の時にあった。正常分娩，離乳は生後1年時，排泄訓練は2歳から3歳の間，幼稚園時代はおままごとの好きな女児であったという。

面接で彼女は緊張感が高く，寡黙で自発的に自己を語る事はなかった。質問に少ない言葉と身振り態度で応じたが，思春期前半の恥じらいの強い様子が感じられた。彼女は中学入学以来制服のスカートを極端に嫌がっていたが，不登校後，スカートは一切はかずにジーンズで通している。4回のアセスメント面接で毎回ごとに不安は増大しているように見えたので，無理に個人療法に導入することはせずに，隔週の母親ガイダンスだけを治療方針として選択した。

アセスメントの説明

以下の説明を本人と母親に伝えた。すなわち思春期が進み，自分が女性であることを否定しがたくなるにつれて，女性であることに居心地の悪さを感じているようである。性別同一性障害という診断もありえるが，そのように断定するのは成人期まで待つべきである。いよいよ女性らしくなって行くこの時期に，女子中学では仲間同士の会話で，私と言わずに俺と言う子もいるものだが，時が経つうちに素敵な女性らしい女性に仕上がっていく事が殆どである。従って，今，男に生まれたかった，男に産み直せという気持がどのように変わって行くかを楽しみにして待っていれば，それで十分であろう，と伝えた。学校に関しては，今は非常に不安が高いので，登校は難しいと思われるが，通常数年の経過の中で新たな女性としての身体にも慣れてきて，不安は低下してくる。本人は母親に自分の気持を言葉で話すように努めれば良いし，母親は娘の話に耳を傾けて理解しようとすれば，それが一番望ましい解決策であろう，と伝えた。本人は黙って説明を聞いていて，感想を述べる事はなかった。母親は，数年の間，現在のような状況が続くのだろうか，一人で対応するのはとても大変そうで，その役割を果たせるかどうか心配。とにかくやる以外ないんですね，と感想を述べた。

ガイダンス経過

中学2年—3年（1年半）

母親は毎回同じような娘の暴言暴力について語った。担任教諭からはしっかりした女子教育をすべきなのに，母親が逃げ腰すぎると母親に思わせるような発言があった。母親はこの発言を気にしていた。週末に父親がいると，娘たちは静かに良い子にしているので，普段の母親の大変さは夫に分かってもらえないとこぼした。

男に産みなおせという彼女の要求の意味するところは当初全く理解することはできなかった。そして激しい暴言暴力への対処が主な仕事になった。父親も姉も不在の時間帯に発生することが多く，母親は彼女に嫌気を抱くだけでなく，怖れも抱くようになっていた。それがまた暴力を増幅させていた。そこで最寄の警察署生活安全課を訪れて，実情を話して，本当に危険を感じた時には署に連絡をするように精神科医から助言されたことも伝えるように助言した。そして母親は生活安全課で丁寧な対応をしてもらった。それによって母親の安全感は少し回復して，娘との接触はやや改善した。

母親の話からセラピストには次のようなことが想像できるようになった。すなわち母親，姉三人の父親不在の家庭の中で一番年下の娘が育って行くのは，それ自体大変な営みであって，安心して身体的な成熟を心で受けとめていくのは難しいことを母親に分かってもらいたいのではないか？ これを母親に伝えたところ，母親には思い当たるところがあって，それまで男に産みなおせと言われると，娘は狂ったのではないかと感じていたが，狂ったわけではないのかもしれない，と母親に心境の変化が生じた。そして男に産みなおせと言われて，思わず逃げ出したくなるのは，それを字義通りに受け取り過ぎていたからだが，そうでないとすれば，自分の態度は娘の目には逃げに映っていただろうと母親は気づいた。母親自身のこの気づきによって，母親の耐性は高まり，娘の語りかけに耳を傾けることができるようになった。

母親は娘の暴力については余り話さずに，現在と昔の家庭を比較するようになった。下の二人が幼かった頃の母子は，二人の大人の女性（母親と長姉）と二人の娘（下の二人）という感じが強かったが，下の二人が小学校の高学年になると，次第に4人の女性たちの家族という雰囲気が出てきた。競争関係は強まり，緊張場面は増えた。一番下の娘の居心地は必ずしも良いものではなかったようである。母親のこうした振り返りをまとめて，セラピストは次のように母親に説明した。すなわち母親と思春期の娘の競争や争い，憎しみ合いなどの問題はどの親子や家庭にも見られるものであり，一般的には父親が介在しないと母と娘の感情の対立や抗争は修復できない，と言われ

ている，と。そして父親が母と娘の双方にポジティブな言葉かけをすると良いであろうと助言した。それには，たまの週末に状況を選んで父親が言葉かけするのも良いであろうし，娘に短い手紙でちょっとしたことを誉めたり，励ましたりするのも賢明であろうと伝えた。母親はすぐに夫に連絡をして対応を頼んだ。夫はその父親役割を理解して実行を心がけるようになった。具体的には父親が週末に家に戻ったら、娘に声をかけるとか，無視していないよという合図を送るとかであり，またお誕生日のお祝いのカードを送るなどであった。

このような変化の中，3年生の1学期に担任から主治医に直接電話連絡が入った。母親の了解のもとでの連絡で，不登校のまま卒業を認めることのメリットとディメリットについての質問であった。メリットを説明したところ，校長と担任と主治医でミーティングをもつことになった。こうして学校は高校推薦はできないが，主要教科ごとに課題を出すので，課題提出をもって評価して卒業を認めることになった。

母親も父親も中学卒業後も家庭に引きこもり続けそうな状況を容認することが娘の一生にどのような影響を与える事になるのかを心配した。セラピストはこれまでの経験から思春期のひきこもりの多くは17歳前後になると新しい自分の大人の身体に慣れてきて，不安は下がり，社会の中での自分の場所を考えて前進を始める事が多い。そうならずにその後もひきこもり続ける事例は非常に少ない。このような事例では思春期のひきこもりを無理やり解消させようと親が焦りすぎて子どもに厳しすぎる要求をしたり，親子でせめぎ合ったりして，お互いにお互いを傷つけ合ってしまう。そして親子ともども二次的な心の損傷を受けてしまって先に進めなくなっていることが多い。だから，娘さんがどうしても高校に入学したいと思っていれば話は別だが，そうでない限り，無理に高校やフリースクールなどに入学する必要はない。むしろ娘さんの回復を待つほうが賢明ではないか。そうすれば必ず大学進学への道が100%開けるとまでは保証できないが，そうなる可能性を壊さずに娘さんの将来に期待をかけ続けることができる，と説明した。この説明を踏まえて両親で相談をした結果，高校については本人の決断に任せようと合意して，それを娘に伝えた。彼女は，高校受験はしないと決めた。

そして課題に対応する作業について彼女は母親と話し合い，また母親が外出できない娘に代わって教材を買ってくるなど再び娘に協力しつつ親子の生産的なやり取りが回復した。このように課題を提出して卒業するという営みは，本人にとっても母親にとっても良い経験になったようであり，母親への彼女の暴言暴力は殆ど消えた。

中学卒業後の2年間高校には進学せずに，本人の思うままの毎日を過ごすようになった。彼女は歴史が好きで，歴史の本を読む時間が次第に長くなった。父親との交流が始まって久しいが，父親との間で何か娘にとって受け入れがたいことがあったようである。その後1年前後は父と娘のもめ事が表面化するようになった。たとえば父親が自宅用のコンピュータを買って間もない頃に，彼女はコンピュータの内部やキーボードに接着剤を流し込んで使用不能にしたり，また別の時には週末を迎えて，父親の帰宅する直前に玄関脇の壁一面をすっかり壊してしまった。父親は帰宅するなり激怒して二人は取っ組み合いの喧嘩を始めた。それを見た母親は娘が殺されると心配して，警察署にかけこんだ。警察官が自宅に駆けつけた時に父親と娘は大きく息をしながら床に座り込んでいたという。父親からも娘からもこれに関する情報は殆どないので，何が起きていたのかは分からないが，以降，彼女は大きく前進した。外出が3年ぶりに回復した。彼女は町の書店で何冊も歴史書を読みふけるようになった。そこでセラピストは大検経由の大学入学の可能性を娘に伝えるように母親に助言した。

それを聞いた彼女は元同級生の何人かと電話で話をするようになった。元同級生は元担任がボーイフレンドとうまくいっているとかなどの学

校での噂話の実況中継を主にしたようであるが，それだけでなく近づく大学受験への皆の準備状況についても話してくれたようであった。年が明けると，彼女は大検塾に通いたいと母親に言い出した。そしてすぐに大検塾に通う毎日が始まった。春には塾の講師に大検は大丈夫だから大学受験勉強に切り替えるように勧められた。こうして彼女は，元同級生と共に大学に入学する夢を抱くことができるようになった。この時彼女は心配だからカウンセリングも同時に受けたいと母親に伝えた。そこで親ガイダンスは目的を達成して終了することになった。そして娘への支持的な個人精神療法を開始したが，その翌年には志望大学に入学。その大学も無事に卒業して就職に至っている。

事例5：初診時18歳の男性（不登校・家庭内暴力・ひきこもり）

概要

高校2年で高校を退学した後，自宅にひきこもる男子。中学までは元気で過ごしていたが，高校に入学直後より通学途中の電車の中でパニック発作を経験した。電車に乗れなくなって，不登校に陥った。とは言え，希望の大学に付属する高校に入学したので，母親は何とか登校させようとタクシー通学も試みさせたが，同様なパニックに襲われて閑居を続けるようになり，間もなく母親に暴力を振るうようにもなった。そのため母親は軽度の捻挫や肋骨の骨折などを受傷したことがある。2年生になっても状況は変わらず約1年半前に退学した。高校入学以来，同性の友人関係は途切れている。

父親はサラリーマンで母親はパート勤めをしている。姉はフルタイムの仕事について単身生活を実家のそばでしている。両親の仲が割れて久しいが，母親は父親と一緒の部屋で休むつもりはなく，息子が小学校の2年生以来．母親は息子と布団を並べている。今では夫婦の会話は喧嘩以外に全くなくなっている。以前，父親は母親の作る食事や食器の洗い方に細かな文句をつける癖があり，母親は結婚当初，父親（夫）の意に沿うように努めていたが，息子が小学校に入学する頃には，夫の満足することはないと見切って，対立するようになった。セックスレスになると共に，夫婦は別の部屋に，母親は息子と同じ部屋で休むようになった。

本人との面接では，非常に不安が高く，自ら自己を語ることは殆どできなかった。母親への暴力はコントロールしがたく，ついつい手や足が出てしまう。母親に捻挫させたり，肋骨を骨折させてしまったりで，本当に自分のことを嫌になってしまうし，将来に絶望するという。2回目の面接までは来院したが，3回目以降は来院することができなくなった。

アセスメントの説明

アセスメントは両親に伝えた。外出恐怖が主な症状であり，この不安は自分が母親を父親から奪い取ってしまったという勝利感と罪悪感に基づいて生じる父親からの報復を恐れてのものであり，いわゆる神経症性の不安である。母親と同室で起居するのは息子さんの幼児期の願望の勝利ではあるが，この報復の恐怖をもたらすので，すぐに解消したほうが良いであろう。両親が同室に戻り，息子さんが父親の部屋に移るのはどうだろうか，と提案した。

この提案について母親は，間髪を入れずにそれは無理と応じた。理由を問うと，夫に対する文句が溢れ出てきた。決して建設的な気持からの発言ではなく，夫婦関係の改善には相当の時間を必要とすることが自明であった。父親もまた負けずに母親について批判した。セラピストはとにかく母親と18歳の息子が同じ部屋で布団を並べて休むのは不適切であり，それが不安を作り出すのだから，早急に解消したほうが良いと述べて，取りあえず息子さんのために両親としてできるのはこの解決のみであることを伝えた。

次回，部屋数も少なく，夫婦が一緒に同じ部屋で休むか，これまでのように母親と息子さんが一緒に起居することになると母親は語った。セラピストがなお母親と息子さんの分離を提言したところ，母親は自分の兄に頼んで，息子を兄宅に預けることを決めた。父親に異論はなかった。
そして息子さんは兄宅で暮らすことでどうなっていくかを見ていくことを目的に両親ガイダンスを毎月1回実施することになった。

ガイダンスの経過

親ガイダンスは約1年，10回ほどで終了した。両親は毎回別々に来院して，ガイダンス終了後は別々に帰宅した。毎回，両親の夫婦喧嘩の連続であった。まず，二人は面接室に入るドアの前で，どちらが先に入るかで言い合い，面接室に入れば、どちら側の椅子に座るかで言い争った。
ようやく着座すると，今度はどちらが話の口火を切るかで争った。ようやくどちらかが話し始めるのだが，そこまで最低10分はかかった。どちらかが話し始めて最長10秒以内で，もう一方が話の腰を折るようにして話に割って入ってきた。セラピストは落ち着いて話を聞くことができずに，呆然と成り行きを見守ることが多かった。しかし，それではプロセスは進まないので，話始めた親の話の文脈を追うように，そして話をしていない親からの妨害は止めるように心がけた。セラピストはそうしているうちに頭がボーッとしてくるようになり，多分，息子さんはこんな感じで小中学校時代をすごしていたのだろうと想像した。息子さんが小学校時代には夕食を家族3人か4人で共にすることもあったが，食事が始まると間もなく夫が食事の味付けに文句を言い出して口論が始まったという。口論は食器を洗い終わるまで続いたらしい。長女は短大卒業と共に就職して，小さなアパートで一人暮らしを始めて，母親とのコミュニケーションは続いているが，父親とは話もしないし，会いもしないという。セラピストは，息子さんは相当我慢強く，母親を支える役割を果たしてきていたようだと感想を述べた。こうした通常のガイダンスのやり取りは1セッションあたり数分もてれば良いほうであった。

息子さんが母親の兄宅に移って3ヶ月も経過すると外出恐怖は消失して，表情も明るくなったという。母親は同室で息子と布団を並べて休むことが，そんなに影響していたのだろうかと疑問を持ち出した。セラピストは他にどんな可能性が考えられるのだろうかと質問で応えた。両親ともに他の可能性は思い浮かばず，そういうことなら息子が完全に元気になるまで、兄に頼んでみようということになった。

半年後，息子は運転免許証を取りに自動車学校に通い始めて，すっかり元気になったという。そして母親は我慢できずに息子を自宅に戻した。2週間も経たないうちに息子さんは感情的に不安定になって，母親に暴力を振るい始めた。両親とも，息子にとって自分たちと一緒に暮らすことがマイナスになるのを目の当たりにして，再び，息子を兄宅に預けることにした。

ガイダンス開始1年の頃に，両親は初めて言い争うことなく面接室のドアを開け，着座した。本当に初めての出来事であった。そして言い争うことなく，父親が言うには，「自分たちは本当に仲が悪いと分かった」。これに続いて母親が，「それでも私たちは離婚しないで」，それを父親が引き取って，「同じ屋根の下，別々に暮らして行こうと意見が合いました」。今度は母親が，「だからこれ以上先生に無駄な時間を使わせたら悪いので，今日でカウンセリングは最後にしようと二人の話は合ったんです」。息子は伯父宅から専門学校に通い始めていた。

事例6　初診時15歳中学3年，女子（摂食障害，体重減少）

中学2年生の夏頃から母親の痩せが目立つようになった。3学期には生理が止まり，中学3年生の1学期にはBMIが16前後になった。学校の身体検査で注意されて受診したが，この1ヶ月間の摂食状況は急速に悪化している。初診時，BMIは16.5あり，血清電解質は正常値であった。

食欲不振で脂物は一切食べない。母親が無理に食べさせようとすると，てんぷらの皮を取って紙で油をふき取って食べる。母親が元気をつけようと思ってカロリーの高い食事を準備すれば，箸をつけないという。母親と娘の間は常に「食べなさい vs 食べない」の争いの連続である。

痩せのきっかけは下校時に仲間で学用品を買いに行った折にあった。みんなは店に入るのだが，それは校則違反になるので，彼女は店のドアの前で足が止まって入ることができなかった。このエピソードをきっかけに仲間から真面目すぎると言われるようになった。彼女自身，確かに学用品を買うために文房具屋に立ち寄るくらい良いのではないかという思いがないわけではない。しかし，店に入ろうとすると校則は守るためにあるのよ，という母親の言葉が頭に浮かび，足が止まってしまうのだという。仲間はファウンデーションを使ってみたり，マニキュア，口紅，頬紅，おしゃれなTシャツなど，家で楽しむようになって，学校の休み時間には，そうした話で仲間は盛り上がるのだが，彼女はみんなと一緒に話の輪に加わりたい気持と，それはダメという思いとが交錯して，落ち着かなくなる。そのうち気がついてみれば，体重減少が始まっていたという。

父は仕事に忙しく，母は専業主婦。3歳年下の弟がいる。母親は，娘がこれまで順調に育って来ていたので，何が子育ての失敗だったのか分からないが，何か失敗があったに違いない，父親は仕事柄休日でも緊急に駆けつけねばならず，子どもたちと距離がありすぎたのかもしれない、と思っている。父親は娘のお仕置きに暗い押入れに入れたのがいけなかったのかな、と反省している。母親は長男（弟）を妊娠している時に，近づいてきた娘を思わず押し返したことがあり，それがいけなかったのかな。その時の娘のびっくりした表情は今でも忘れられない。あの思わずの拒絶がいけなかったのかと考えている，という。

本人は既に述べたように年齢相応の興味を受け入れる事ができずに親友と距離ができ始めていることを伝えてきだ。発達のマイルストーンはすべて正常ないし正常範囲内であり，特記すべきようなことはない。

アセスメントの説明

中学 2 年生までは通常の発達をしてきていたが，思春期が進むにつれて，自分が大人の女性になりつつある中で内側から沸き起こる興味を仲間は受け入れてお洒落をしたり，罪のない校則破りをしたりしている。ところが娘さん自身は小学校時代に親の言うことを全部守ります，みたいな真面目さを今でも維持しているようだ。この超自我の緩和と呼ばれる過程が停滞しているために，自分の内側から沸き起こってくる年齢相応の興味を満足させたい自分は悪い子である，といった気持になるのだろう。低体重つまり栄養不良状態になると身体は性的な側面を切り落として生命や身体を守ろうとするようにできていて，だから摂取カロリーを減らして低体重になっているように見える。この 1 ヶ月の急速な体重減少は，学校から注意されて母親が娘さんに何とか食べさせようと必死になって，彼女の摂取量を増やそうとした結果であるのかもしれない。BMI はまだ 16 を切っているわけではないので，そこまで焦る必要はなく，まずは赤信号，みんなで渡れば怖くない，といった仲間の行動に参加できるようになること，おしゃれやお化粧にも興味をもって良いのだと思えるような娘さんになってもらう必要がある。

父親はこの説明におおむね納得したが，小学校の頃に比べて，娘さんが父親に相談を持ちかけなくなっているのだが，それはどう理解すれば良いのか，と疑問を投げかけられた。この発達期には近親姦の掟が作動するため，娘さんは父親との距離を取るようになるのが自然であり，その意味では娘さんの育ちは悪くない，自然の掟の通りに育っている部分もあるという事になる，と説明した。母親は自ら考えてきている子育ての失敗にこだわり，どこに失敗があったのか，教えて欲しいと述べた。このような心の発達の問題について，原因はこれ一つである，と特定することはできない

のが常であり，むしろ多種多様ないくつもの要因が重なりあって発生する，と理解されている。生まれつきの素因からいくつもの環境因まであるので，どうしてこういう問題が生じたのかを理解するのは難しいし，それに拘る事が娘さんを助けることにはならないと説明した。

治療として本人が望めば個人精神療法は勧められる。また，娘さんの家での様子を親から聞いて親としてできる手助けについて助言を提供することはできる，と伝えた。娘さんは治療を拒否して，母親はガイダンスを望んだ。

親ガイダンスの経過

摂食行動について親は一切口出しせず，娘さんにすべてを任せるようにしたところ，娘さんの摂食行動は急速に回復して危機は脱出した。この助言に対して母親は，子どもの食べ物について細心の注意を払うのが母親の役目ではないのですか？と訝った。母親の母親役割に対する思い入れは非常に強く，そこで自律性や主体性についての説明して理解を得るようにした。母親にとって娘の摂食行動を娘に任せるのは大変な作業であったが，そうすると娘の摂食行動に改善が見られるので，母親も頑張った。ただ学校のお弁当を作るのは母親の仕事であったため，これには丹精こめてお弁当作りに励んだ。しかしある日，母親は娘が家の近くのごみ集積場でお弁当箱をひっくり返すところを目撃してしまった。

母親はガイダンスの日まで何も娘に言わずに持ちこたえた。そしてどういうことなのか，と説明を求めた。セラピストは娘さんは母親の気持を思い遣って渡されたお弁当箱をカバンに入れるのだが，母親の作るお弁当を学校で開いてみると栄養バランスの整ったエネルギーも十分なお弁当が詰まっていて，それを食べたい気持と食べたくない気持が刺激されてたまらないのではないか? 周りの同級生からも何か言われるだろうし，だから学校には空のお弁当箱を持って行くのが気楽で良いのだろう。そんな罰当たりの行動を許すのが正しい育児ですか？と母親はセラピストに詰め寄った。セラピストは正しいとか，間違っているとかではなく，大人に育ちゆく今，母親の言いつけを守らない自分があって良いということを本当に納得しなければならない娘さんに，お弁当を捨ててはいけないと言うのは，どうでしょうか？とセラピストは母親に返した。暫く考えて母親は，自分は今までずっと母親の言いつけを守り，背いたことは一度としてありません，と述べた。その話を続けると母親の精神療法の領域に入って行ってしまうので，親ガイダンスではそれ以上のコメントはしなかった。しかし，この母親の言葉は何故娘が母親の「校則は守るもの」を覆して同級生と一緒に文房具屋に入ることができなかったか，ファッションやお化粧への興味を押し殺し続けるのかを雄弁に物語るものではあった。

肉やてんぷらも普通に食べるようになるには時間がかかった。ガイダンスを開始して半年も経過した頃，母親は娘が母親の前で一人前の食事をするものの，その直後にトイレに入るので，娘は嘔吐しているのではないかと疑うようになった。この疑いは決して的外れではなかったのかもしれないが，セラピストはそれも娘に任すように伝えた。ガイダンスの方針としては，娘の自律性を尊重して娘の主体的な前向きの動きを信じて待つ姿勢を一貫して保った。1年後，BMIは18.5に近づいて，神経性無食欲症の危機は去った。しかし，今度は時折の腹痛発作が発生するようになった。症状移動であるが，この腹痛発作は2-3ヶ月に一度程度のものであり，あまり苦しがるときには病院の専門家の診察に委ねることにした。こうして1年から1年半が経過して親ガイダンスは終了した。その後娘は大学入学後に自ら個人精神療法を希望して受け始めた。

事例7：初診時25歳男子（ひきこもり・家庭内暴力）

中学2年生の時に不登校に陥り，児童精神科の精神科医のカウンセリングを受けてきた。そして大検経由で大学に入学して自宅から遠く離れて生活を始めた。しかし街で暴力行為に及んで大学

を中退してしまった。その後，自宅にひきこもり続ける青年である。両親と息子の三人暮らし。姉は職について一人で生活している。20 台の半ばになっても父親や母親への暴力行為のために両親は来談した。しかし，息子にそういう説明をすると怒り出すので，母親自身のことで相談に行くと息子には説明しているという。

父親は超多忙なサラリーマンで息子の幼児期から母と息子は密着した関係にあった。息子の思春期を迎えて近すぎる母子の関係のために不安が亢進して不登校に陥ったように思われた。その関係は今でも続き，母親はサディスティックな息子の要求をマゾキスティックに受け止めるようである。例えば，真夏の暑い最中，僕は冷房は嫌いだと全てのスイッチを切る。すると母親は汗を流しながら息子の要求を受け入れる。また母親が休んでいるところにやってきて，布団の中に入ってくる，母親のおなかの上に頭を乗せて，僕はママとこうしているのが一番幸せだあ，と言うのだそうだ。時には母親の保護者であるかのような素振りもするという。その一方，機嫌が悪くなると，母親に痣ができるほどの強さで殴ってくる。一次は痣の消えることがなかった時代もあったという。

アセスメントの説明

不登校から抜け出すのがむずかしく今日に至っているのだが，明らかにエネルギーをもてあまし気味である。家庭の中で一番我が物顔にしているが，そうさせるのはまずいかもしれない。何故ならば，居候をさせてあげているのは両親であり，彼は両親に頭を下げてお願いすべき立場にあるのだから。いきなりそういう立場を入れ替えるのはむずかしいが，徐々にここは両親の家であり，彼はその家を親の好意によって使わせてもらっているのだ，と彼に説明しても良いのではないか。父親は，それはその通りで，息子にそう言ってやりたいが，今いきなり言ったならば，彼は激怒するように思う，と。母親は確かに自分が甘やかせてきてしまっているが，彼にはついついそうしてしまいたくなるようなセンスがあると，まるで息子自慢をするかのような発言をした。取り合えず，両親としては彼の暴力にはこれまで耐えに耐えてきた。しかし，両親は老いてきていて，もう暴力には耐えられないので，暴力は止めにして欲しいと伝えることになった。冷房や布団に入ってくることについては，そういう行動が生じた時に，母親がしっかり No と彼に伝えるようにと勧めて両親は了解した。そして父親の多忙な仕事もあり，母親ガイダンスを中心に必要に応じて父親も参加することになった。

ガイダンス経過

母親一人の来談では，息子の問題は父親が不在だからいけないのだ，というのが母親の基本的な考えで，それによって母親と息子の幼児的な馴れ合いを自分では許しているかのようであった。そして息子からセラピストに電話が入った。その時彼は，彼が私をチェックして母親が見てもらうべき精神科医か否か判断するみたいなことを述べて母親の代わりに来談したいと述べた。私は両親が私と相談をしたいと判断したのだから，息子さんにはそのようなことをしてほしいとご両親は言われていない。だから私には彼と会う必要はないと丁寧に説明して来院を断った。以来，彼からの連絡はない。そして安定した親ガイダンスの経過を辿った。

夏が来て，冷房の問題が生じた。そこでセラピストは母親に，息子さんにご両親から次のように伝えてはどうか，と助言した。すなわち，ここは父親と母親の家で，居間の冷房を切ると両親には暑すぎる。だからスイッチは切りません。暑いのが良いのなら，自分の部屋の中はいくら暑くても良いから，自分の部屋で過ごして欲しいと彼に伝える。そして両親の予想に反して，息子は親の言葉に従った。何故息子は暴力的にならずにおとなしく親のいう事を聞いたのか，不思議であり，分からないという両親に，多分，幼稚園に通う男の子には，母親に気に入ってもらいたい，認められたいという強い願いがあり，そのためにナイトを

気取る幼児もいるが，息子さんにもそういうところがあるのだろう。ナイト気取りは思春期以降漸減して行くのだが，彼の場合は不登校で仲間関係が切れてしまったため，今でもそういう傾向が削り落とされていないのではないか？ 職業訓練を受ける，その他の教育を受けるなどの経験を積む中で，幼児性が漸減していくはずなので，その事を彼に伝える必要はないと説明した。父親は納得したが，母親には通じた感じではなかった。いずれにしてもその夏，冷房を切ることなく無事に秋を迎えた。

息子が布団に入って来て，という話が出た。そこでセラピストはフロイトのハンス少年の話を持ち出して，洋の東西を問わず，男の子は母親と一緒にいたいという願いをもつものだが，その願いを諦めねばならない運命の元に生まれてきている，そして諦める事ができれば，大人になって行けるのだが，そうでないといつまでもお母さんの大きな赤ちゃんのままで大人になりきれないのだと説明した。そして母親が息子さんをいつまでも自分の赤ちゃんとして可愛がっていたい，そのためには自分の息子の発達を犠牲にしても構わないと思うのであれば，それはそれで良いだろう，と伝えた。更に実際に，世の中のお母さんの中には，あの子が一番私の気持を和ませてくれるし，可愛い。学校に行かなくても，仕事に行かなくてもとにかく可愛いし，あの子がそばにいてくれるだけで私は幸せな気持になれると言われる方も少なからずおられるものですよ、とも付け加えた。だから，息子さんが今のひきこもりから抜け出す手伝いをするのか，それともいつまでもお布団に入ってきてもらいたいのか，よくよくご自分の気持に聞いてみて決めて下さいと助言した。私は布団の中に入ってきてもらいたいとは思わないから，入ってくるな，と息子に言います，と決断して，実際に，そう伝えた。そこでも暴力は生じなかった。代わりに，息子さんは青年期デイケアに通うようになった。

事例８：初診時25歳女子（抑うつとひきこもり・自立の試みと失敗）

父親はサラリーマンで母親は専業主婦の３人暮らし。３歳違いの弟は独立している。本人は外国の大学を卒業する見込みが立ち，かつ，その国の教諭の資格も得た。間もなく卒業というところで，ルームメイトとの口論をきっかけに突然やる気を失い，外国の精神科クリニックを受診して日本で治療を受けるようにと勧められた。卒業はしたものの外国にとどまって仕事を始めるか日本に戻るかを迷いつつ，母親に連れられて日本に戻ってきた。

しかし日本に戻った事を高校時代の友人にも知らせもせずに自宅閑居して孤立を続けた。両親の勧めに応じて精神科クリニックで非定型性抗精神病薬と SSRI を中心とする薬物療法を約１年にわたって受けた。しかし何ら改善はしなかった。そして体重は30キロ以上増加した。本人は体重増加について訴えたが，主治医はそれを取り上げてくれず，本人は治療拒否するに至った。家では母親に無理難題を投げかけたり父親に暴言を吐きつける日々が続いた。そのため母親は親交のある外国人牧師と相談して，牧師は娘を誘い出して元気づけようと何回も試みてくれたが，結果は得られなかった。そこで両親はガイダンスを求めて来院した。

本人には高校時代に抑うつ感と希死念慮のエピソードがあった。彼女の不幸感は小学校低学年の頃からのものであるが，それは両親の夫婦仲に起因するものであった。夫は末っ子で母親の目に入れても痛くない息子であったが，それだけに父親は定期的に実家の母親に会いに行きたいと考えて，親子４人で定期的に実家を訪れていた。ところが彼女の幼稚園の頃，母親と姑との対立が表面化して，小学校の２年生の頃から母親は父親の実家訪問を拒否するようになった。父親はそれでも子ども二人を連れて実家訪問を続けた。彼女と弟は両親の間に挟まれて辛い思いをしたのだという。彼女は母親が可哀想でいつも母親の気に入るように心がけて小学校時代を過ごしたという。中学生になると母親の意に沿うだけでは済まな

くなり，反抗するようになった。しかし，娘からの反抗を受けると母親の動揺は大きく，そのため彼女は思うような発言や行動を取りたいと思いつつ我慢をすることが少なくなった。父親に相談することもためらっていたが，中学3年生のある時，1年間の高校留学の宣伝を読んで高校1年の時に留学した。これには両親も賛成してくれた。留学中はホームステイして自分の思いのままに学校生活を楽しむ事ができた。これで自分は年齢相応の高校生になれると思って帰国したが，復学してみると留学時代とは異なって，常に母親の監視のもとで自由や自主性のない毎日を過ごさねばならないと強く思うようになった。この拘束感から逃れ出るために彼女は似た感情を抱く同学年の仲間で夜遅くまで出歩くようになった。ある時，友人宅に泊まるつもりで母親に連絡をしたところ，母親にこれから父親が迎えに行くからと言われてしまった。家への帰路の車の中で，彼女は打ちひしがれた思いを味わい，留学前から何も変わっていない，自分が留学で達成したはずの前進は幻に過ぎなかったと感じて落ち込んだ。そして死にたくなって高層マンションに登って死場を探した。こうして2回目の高校1年生から3年間，カウンセリングを受けた。その結果，彼女は外国の大学への進学を選んだという。

両親と面談後に娘さんとの面接を実施したが，以上に述べたような個人史が語られた。長い間自宅閑居で外出しないままに過ごしていたとは言うが，精神運動抑制も希死念慮も認められなかった。

アセスメントの説明

うつ病と複数の精神科医から診断を受けているとおり，感情障害があるのかもしれない。しかし，いずれのエピソード共，親離れ，殊に母親からの離脱の過程で先に進む事が困難になっているようであり，その部分を乗り越えて行くことも大事であろう。日曜日に父親や弟と一緒に父方祖父母宅に遊びに行く事は楽しかったのかもしれないが，一人で寂しく家に残る母親への気持は複雑で処理しにくいのではないか。そのため十分に先に進める状況に到達しながら自己破壊的な心の動きが生じるようにも見える。今後の方向性は本人以外に決めることはできないので，自分自身の自律的な決断が下せるまでは散歩などの運動をして体重を元に戻す事，親が適切に対応するように心がける事が取りあえず必要であると伝えた。本人は個人療法を受ける気にはならず，母親が必要に応じて親ガイダンスを受けたいというところで合意した。

ガイダンスの経過

毎月1回程度のガイダンスを2年近く実施した。母親の自己愛傾向は高く，娘とのやり取りについて語り続けるのは困難で，それについてすぐに夫を責める話に移行しがちであった。娘中心の文脈に戻すためにセラピストはしばしば娘の話に戻す働きかけを行なうのが常であった。1ヶ月も経過すると娘の体重は減少し始めて約18ヵ月後には元通りの体重に戻った。この間，薬物療法は不要であった。

外国人牧師は働きかけ続けてくれて，娘は牧師と一緒に山登りに出かけたり，教会の集まりに参加したりするようになった。娘は長い間，自分の力で両親の仲を取り持ちたいと願ってきた。大学の長期休暇で日本に戻った時にいつもそう願ってきたが，毎回，がっかりする結果であり，自己への落胆は大きかった，と母親に初めて語ったという。その話を聞いた母親はそれは無理よ，私とパパの仲の悪さは二人でもどうにもならないのよ，これまでに夫婦カウンセリングを受けたことも一度ならずあるけど，どうしてもうまく行かないのよ，と娘に話したという。娘が自分のせいもあって両親の仲は悪いのかもという心配をずっとしてきていて，そうであればこそ，大学時代の休みごとの落胆と神経症的な罪悪感はぬぐうことができなかったという娘は，母親に自分の気持を分かってほしいと願っているのだが，母親は彼女の気持をあまり気に止めずに自分たちの仲がどうにもならないものだというところだけを強

調して応じているように感じられた。つまり自分一人では処理しきれない感情を娘は母親に分かって助けてもらおうと話しているのだが，母親は娘の役に立たない返答をしているのかもしれないとセラピストは想像した。そこでセラピストは母親に，娘さんはどんな事を求めて，お母さんにその話をしたと思われますか？と質問した。

セラピストの想像の通り母親の関心は自分たちの夫婦仲に向いてしまい，娘がどのように感じているか，心配しているかというところに関心を向けるのは労の多い，中々報われない作業であった。そこでセラピストは母親の関心を娘に向け続ける状況を確認しながら，父親と弟と一緒に父親の実家に喜んで出かけようとする自分と怒りや悲しみの溢れる母親とを対比して，お母さんに悪い事をしているな，と感じる娘の気持を母親に分かってもらいたがっている事を理解しましょう，と繰り返した。ここまで伝えても，母親の娘への関心を持続させるのは至難の作業であった。しかし，母親として娘にしてあげられることは限られていて，娘さんは自力で自立しなければならない。娘の将来は娘が決めなかれ場ならないのだ、と理解して母親は娘さんが日本で大人になるのか，外国で大人になるのかは娘に任せようと思えるようになった。

E. 結論

事例集を作成した。

F. 健康危険情報

特にない。

G. 研究発表

なし。

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

なし。

文 献

(1) 小此木啓吾、片山登和子、山本允子ほか　：児童治療における並行母親面接（その１その２）　児童精神医学とその近接領域　１０（３）,1969.

(2) 小此木啓吾、片山登和子、滝口俊子ほか　：児童・思春期患者と家族とのかかわり　講座家族精神医学３　ライフサイクルと家族の病理　弘文堂,1982.

(3) 小此木啓吾、片山登和子、滝口俊子　：父母カウンセリングと父母治療　講座家族神医学４　家族の診断と治療　弘文堂,1982.

(4) 皆川邦直　:思春期の子どもの精神発達と精神病理をとらえるための両親との面接－主に治療契約までの親ガイダンスをめぐって―　思春期青年期精神医学　1：７８－８４,1991.

(5) 皆川邦直　:両親（親）ガイダンスをめぐって　思春期青年期精神医学　３（１）２２－３０,1993.

(6) 皆川邦直　:グループ親ガイダンス（その１）　思春期青年期精神医学　１１（１），６４－６８,2001.

(7) Furman,E.:FilialTherapy.InHarrisonBasicHandbookofChildPsychiatry. vol.III.149-158.BasicBooks,New York,1979.

(8) Morton Chethik: 子どもの心理療法－サイコダイナミクスに学ぶ(斉藤久美子監訳)創元社.1999

厚生労働科学研究費補助金(こころの健康科学研究事業)
分担研究報告書

中学生・高校生に見出される不登校・ひきこもりの実態把握に関する研究
－高校生の実態と教育相談機関による支援－

分担研究者　弘中正美[1)]
研究協力者　岡安孝弘[1)]　吉村順子[1)]　太田智佐子[1)]　竹村周子[1)]　小粥宏美[2)]　齊藤和貴[2)]
益子洋人[2)]　加室弘子[3)]　北村洋子[4)]　西川一臣[5)]　高嶋裕子[6)]　茅野真起子[7)]

1) 明治大学　2)明治大学大学院　3)世田谷区教育相談室　4)メンタルヘルスビューロー
5)東京都立稔ヶ丘高等学校　6)東京都立清瀬小児病院　7)東京都立新宿山吹高等学校

研究要旨

本研究では、不登校の中学生・高校生の状態を把握し、ひきこもり傾向の強い生徒の特徴を明らかにすることにより、ひきこもりの長期化を防ぐための方策を見出すことを目指す。

本研究の最終年度である平成 21 年度は、高校生のデータ数を増やし、これまであまり把握されてこなかった高校生の不登校の実態を探った。その結果、高校生の不登校生徒の中で、中学生までに不登校を経験した生徒に比べ、高校で初めて不登校になった生徒は対人関係がある程度保たれており、対人回避傾向も低いことがわかった。さらに、不登校生徒への援助のあり方を探るため、教育相談機関における援助の実態を探った。その結果、ひきこもり状態にある不登校の生徒に対して、保護者への面接相談や本人への訪問相談など様々な取り組みが行われているが、さらに充実の必要があることがわかった。さらに、地域専門機関との連携では、定期的な連携の機会を持っている機関が約半数で、連携先は福祉機関が中心で、医療機関など他機関との連携も充実していく必要が示唆された。

A. 研究目的

本研究は、不登校の中学生・高校生の状態を把握し、ひきこもり傾向の強い生徒の特徴を明らかにすることにより、ひきこもりの長期化を防ぐための方策を見出すことを目指す。

研究 2 年次には、不登校の中学生・高校生の実態や対人関係における特徴を把握した。その中で、中学生に比べて高校生は、不登校状態にあっても対人関係がある程度保たれているということがわかった。しかし、平成 20 年度は高校生のデータ数が少なく、それ以上の詳細な検討が困難であった。また、平成 15 年度まで文部科学省調査においても高校生には「不登校」という概念があてはめられなかったこともあり、高校生の不登校についての調査・研究は少なく、その実態は明らかになっていないのが現状である。

そこで、今年度は高校生データを増やし、これまであまり把握されてこなかった高校生の不登校・ひきこもりの実態を明らかにすることを目指した。

さらに今年度、教育相談機関における援助の実態を把握し、不登校・ひきこもりへの援助の課題や今後のあり方を探ることを目的とした。

B. 研究方法

1. 高校生調査

高校生についてデータ数を増やして詳細な検討を行うため、20 年度と同じ質問紙を用いて同時期(夏期休暇中)に新たに 6 校で調査を行い、20 年度のデータと併せて分析を行った。